

特集

快速サーチャー 進化の15年



デモの様子を当時のデータウェア営業部長はこう語る。「デモをした際、数万件レコードから瞬時に検索結果が出てくることに驚くお客さまの顔見るのは非常に心地よかった」

ITホールディングス株式会社
林 唯政 監査役

電子帳票システム「快速サーチャー」誕生から15年
時代のニーズに合わせてその姿を変え、進化し続けてきた
業界シェアの一角を占めるまでに成長したその歴史を辿る

快速サーチャー 進化の15年

快速サーチャーの歴史

電子帳票システム

快速サーチャーⅢ

〈2010年〉
Web対応の電子帳票システム
「快速サーチャーGX」の誕生

統合ログ管理システム



〈2008年〉
統合ログ管理システム
「快速サーチャーログレビ」の誕生

Web対応電子帳票システム



〈2008年〉
電子帳簿保存法に対応した「会計帳簿
検索ソリューション」の誕生

〈2005年〉
「ログ検索ソリューション」を開発

〈2001年〉
各拠点での直接プリントを
可能にする「プリンティング
ソリューション」をオプション
製品に追加

〈2001年〉
「快速サーチャーⅢ」に
インターネット版が誕生

〈2000年〉
クライアントサーバ版として
「快速サーチャーⅢ」が誕生

〈1999年〉
病院にあるレセプトデータ向けの
「レセプトサーチャー」が誕生

〈1997年〉
取引明細帳票を過去に遡って名寄せ検索する
「取引履歴システム」をオプション製品に追加

〈1997年〉
お客さま向けに快速サーチャー用DBを作成する
受託サービスを開始

〈1996年〉
データベースウィンドウ
を付加した「快速サー
チャーDB」が誕生

〈1996年〉
初代「快速サーチャー
電子帳票システム」が
誕生

した。当時、新商品のために、これだけ大きな部が作られるのは稀なことでした。

● 苦しかった3年間

部が発足して3年近くはずっと赤字続きでした。電子帳票システムとしては後発商品であるがために、商品を説明しても他の製品の実績には敵わず、提案で終わってしまうケースがほとんどでした。そんな中、当時の営業を中心としたメンバーで「まずはお客さまに製品を知っていただく」という方針を決め、地道にセミナーやフェアを月一回程度のペースで開催しました。当時、電子帳簿保存法の施行前ということもあり、情報を求めて多くのお客さまが来場され、快速サーチャーの最大の特長である「高速検索」を実際に見ていただくことができました。多くのお客さまが口を揃えて「こんなに速く検索できるのか」と驚き、製品について興味を持つお客さまも増えていきました。

この結果、数ある電子帳票システムの中でも、「高速検索のできる電子帳票システム」という不動の地位を確保することができました。

● お客さまの業務をより便利に、快適にするために…
パッケージとして登場した時の製品名は部内公募

● 快速サーチャー誕生

電子帳票システムは、ペーパレス化が目ざされた80年代から各社でパッケージ製品が販売されており、多くのお客さまが導入、運用を開始していました。その中で後発となる「快速サーチャー」は1996年に誕生しました。

その始まりは、金融機関向け、および国保連合会向けに「電子帳票システム」を商品化して販売することを企画し、新商品として開発したことでした。その後、ある金融機関の事務処理センターから引き合いをいただき、3社の競合のなか「インテックの商品が一番良い」と評価され、内示書までいただきましたが、お客さまのトップの経営判断で既存ベンダーに決定し、惜しくも導入には至りませんでした。この時点で、インテックで開発した電子帳票システムはほぼ出来上がっていたため、システムをパッケージ化して販売するという方針が決定しました。

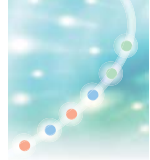
その方針が決定されてすぐ、当時、CD事業を行っていた子会社の担当部門とインテックのCD-ROM販売部隊、「電子帳票システム」販売営業担当者、開発部隊を加えた20名近いメンバーで「データウェア営業部」という、営業・開発部隊をもつ部門が誕生しま

を行い、検索スピードの速さを前面に出した「快速サーチャー」に決定しました。当時は、紙の帳票をそのまま画面に表示し、高速に検索できるというシンプルな製品でしたが、検索スピードがとても速いことで、多くのお客さまに導入され始めてい

■ 当時のパンフレット



望が多く、データベースのようにデータを抽出でき、そこからエクセルやテキストデータなどに保存して二次利用できるデータベースウィンドウは当時他社にはない機能で、お客さまにも喜ばれました。データベースウィンドウが実装されたモデルをその機能名にちなんでアルファベットである「DB」を追加し、「快速サーチャーDB」と命名しました。その後、さまざまな業務アプリケーションのクライアントサーバ化の流れの中で、「快速サーチャーDB」もクライアントサーバ版としてリリースすることになり、その際の内部バージョンが3だったという理由で「DB」から「Ⅲ」に変更し、「快速サーチャーⅢ」という名前になり現在に至ります。



特集

快速サーチャー 進化の15年



独自の検索エンジンADL(高速検索)の秘密

検索に特化した基本性能
 検索エンジンの基本思想が、作成したデータベースに対して、レコードの動的な変更機能を省いて、後からレコード内容に変更が発生しないデータの管理には最適な基本性能を持っています。

差分検索
 前回の検索結果を元にして、差分だけを検索するよう最適化しました。これによって、試行錯誤しながらイベントを探し出すような場面において、検索速度の向上を図ることができます。

スレッドレベルパラレルリズム
 CPUのマルチコア化、メモリーコア化の流れを考慮して、マルチスレッディング性能の向上に対応できるよう最適化を図っています。

領域制御
 検索を開始する前に検索条件を精査して、検索対象となるデータベースの領域を限定するよう最適化を図っており、より高速な検索実行を実現しています。

お客さまの声

導入の背景

3年後には、75tの紙がなくなります。



アスクル株式会社 さま

快速サーチャーIII

大幅なコスト削減と情報の活用を実現

アスクルでは、請求書控を保管するために年間1500パレット(75t)の帳票を印刷し、倉庫にて保管していた。この帳票は閲覧される機会も少なく、印刷、保管、廃棄というサイクルだけ行われており、環境経営で社会貢献を経営目標に掲げているアスクルにとって、このサイクルを止めることは急務となっていた。

「請求書控」を電子化することによって、今まで紙で保管をして廃棄するというサイクルを止めることができ、環境負荷の軽減と業務効率向上、大幅なコスト削減を実現しました。約3年後には倉庫に保管している請求書(控)が0パレットになる予定です。今では、電子化した請求書(控)のデータを活用することで、スピーディーなお客様サービスの提供を実現しています。

ソリユーションサポート
 アカウントマネージメント
 マネージャー
 平川 圭司氏

大量のログも素早く検索できるので、監査の時も安心です。



アステラス製薬株式会社 さま



膨大なログ検索の運用負荷を大幅に低減

アステラス製薬では、2001年に「Lanscope Cat」を導入して以来、年々大量のログが増え続けていった。その結果、さまざまな部門からファイル消失などの問い合わせが増加し、原因を調査するために膨大なログを検索しなければならなかった。そうしたなか、ログ検索の運用負荷軽減のため、2007年に「快速サーチャー」ログ検索ソリューションを導入し、2009年末にはログレビへ移行した。

コーポレートIT部
 次長
 竹沢 幹夫氏

お客さまへのサービスレベルが向上しました。



アイ・エム・エスジャパン株式会社 さま



お客さま向け書籍をオンラインにて提供

MSジャパンでは、主に製薬企業さま向けに医薬品市場の統計データを書籍やCD-ROM、DVD-ROMにて提供している。この統計データの提供をオンライン化する検討は何度も行ってきたが、なかなか実現できなかった。10年近くが経過していた。そんな中、Web対応の「快速サーチャーGX」の存在を知り、オンライン化に向けたサービス運用を本格的に検討し始めた。サービス提供をするための製品として評価され、ユーザ管理などシステム機能の強化後、2011年9月から運用を開始した。

グローバル
 オペレーションズ開発部
 曾我尾 誠氏

社内のコスト削減だけでなく、サービスをご利用いただいているお客さまでも、何年分も保管してきた統計データの書籍の保管場所が不要となり、コスト削減が見込まれます。また、「快速サーチャーGX」にすることで今まで書籍ではできなかった複数の人での同時閲覧や過去分を含めた検索が可能となり、サービスレベルの向上を行うことができました。

● 拡がる快速サーチャー

「快速サーチャー」独自の検索エンジン(ADL)は、検索に特化したシンプルな構造をしています。また作成したデータベースに対して動的な変更機能を排除しているため、後から内容が変更されない帳票データやログデータに対して高速な検索が可能です。その高速検索エンジンをログ管理システムへ活用したのが「快速サーチャーログレビ」でした。

当時、個人情報保護法の施行などでセキュリティ対策に企業が本格的に乗り出し、企業内に蓄積されるログ情報が飛躍的に大きくなっていきました。その流れで、ログデータを保管し、情報漏えいなどセキュリティ事故が起きた場合は迅速に検索し、原因究明に利用したいというお客さまの声から、快速サーチャーログ検索ソリューションを提供し始めました。その後、お客さまに手軽にソリューションを提供できるように製品をパッケージ化し、名前はログの「見える化」を実現する「Log Review(ログレビュ)」という意味を込めて「快速サーチャーログレビ」と名付けました。当初は特定の種類のログだけを取り込み対象としていたものが、パッケージ化の際に、さまざまな種類のログを統合管理できる製品として生まれ変わりました。

2010年には、電子帳票システムの新しいラインナップとして「快速サーチャーGX」をリリースしました。この製品は、完全なWeb対応となり、社内のみならずインターネットを介した社外向けの帳票公開にも利用できる次世代型の電子帳票システムです。名前の「X」には①Generation Ten(Ⅹ)を遙かに超えたX)、②リリースされた2010年の10(X)、③未

知の可能性を秘めた、拡張されたX、という3つの意味が込められています。

現在は、電子帳票ソリューションとして、「快速サーチャーⅢ」、「快速サーチャーGX」、統合ログ管理ソリューションとして「快速サーチャーログレビ」の3製品を展開しています。お客さまに製品をより理解していただくためにハンズオンセミナーの開催やデモサイト、トライアル版を提供しております。今後もお客さまのニーズに応えるため、「快速サーチャー」を軸としたさまざまなプロダクトソリューションを提供してまいります。

● クラウド時代の快速サーチャー

ビジネス環境の急速な変化の中、お客さまのITに対するご要望も広がる一方です。そのようなご要望の中でも非常に多いのがシステムのサービス型での利用についてです。これに応えるため一部の用途で快速サーチャーのASPサービスを実現しております。ビジネスプラットフォームを提供する会社として、今後もグローバル化やサービス化などお客さまのさまざまなニーズにお応えできるよう進化し続けます。

■ 現在のパンフレット

